

Search for the Fourth Animal : Re-investigation on Animal Design on the Zun-shape Potteries in the Zhaobaogou Cultural Stage of the Middle Neolithic Period, Inner Mongolia, China

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-11-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐川, 正敏 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24315

第4の動物を探せ

—— 中国内モンゴル新石器時代趙宝溝文化期の の尊形土器動物文再考 ——

佐川正敏

1 西遼河流域の畑作農耕の起源と興隆窪文化期の食糧

筆者と大学院生は2001～2003年、中国内モンゴル赤峰市敖漢旗にある今から8000～7500年前（新石器時代興隆窪文化期中葉）の興隆窪遺

跡の日中共同調査に参加した（Fig. 1）。発掘調査の概略とその成果の一端は、『東北考古文物論集』（劉国祥2004）、『考古2004年第7期』（劉国祥・邵国田ほか2004）や『2003中国重要考古発見』（劉国祥・田広林ほか2004）、『中国東北地方新石器文化と列島縄文文化の比較研究Ⅰ』（日本

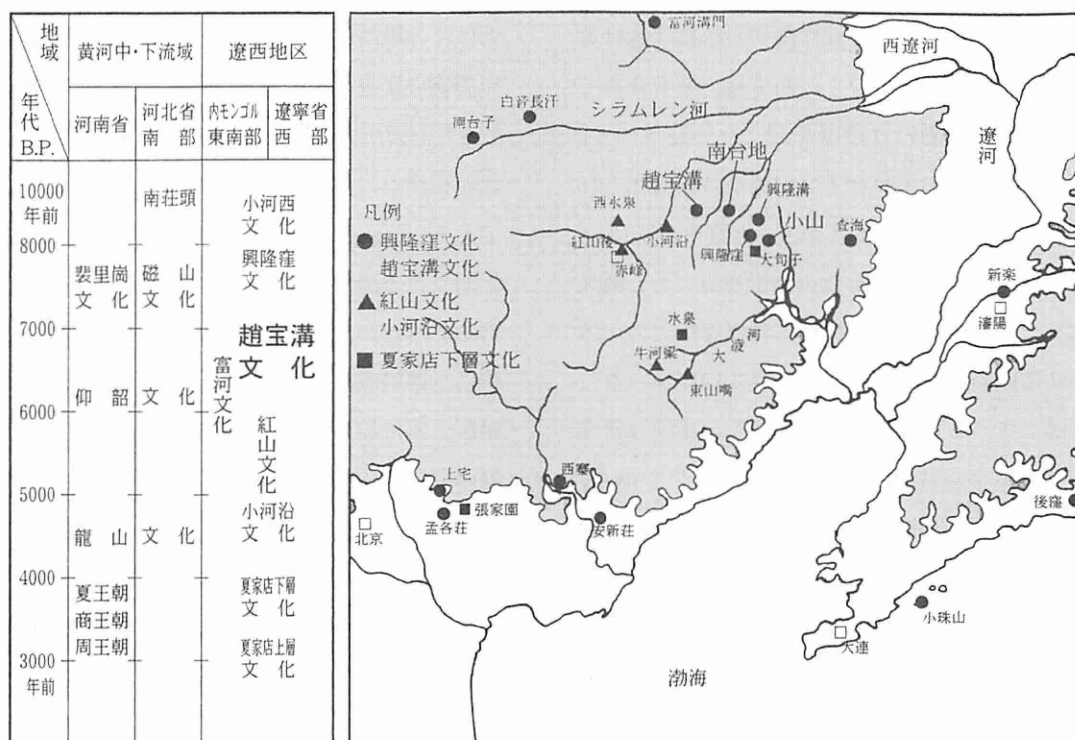


Fig. 1 趙宝溝文化の年代と分布 Date and distribution of sites belonging to the Zhaobaogou culture

中国先史時代遺跡共同研究実行委員会・中国社会科学院考古研究所 2003),『中国遼西地区新石器時代中期興隆窪文化段階の文物集成』(佐川・小林 2004)などにすでに報告されている。また、佐藤真生氏は、2003 年度に本学大学院に対し興隆窪文化期の植刃器をテーマとする修士論文を提出した。現在も筆者らは、赤峰市赤峰学院内にある中国社会科学院考古研究所内モンゴル第一隊工作站をたびたび訪問し、『興隆溝遺跡発掘調査報告書』の 2006 年度刊行を目指して、遺物、とりわけ細石刃技術や植刃器を中心とする整理作業と調査、研究に取り組んでいる。

さて、興隆溝遺跡の最大の成果のひとつは、興隆窪文化期の集落である第一地点の 10 号・31 号竪穴住居跡床面から、多量のキビと少量のアワの炭化種子が発見され、それらが栽培種と鑑定されたことである(劉国祥 2004)。鑑定に当たった中国社会科学院考古研究所の趙志軍氏は、キビやアワなどの畑作農耕の起源問題は黄河中・下流域だけでなく、西遼河流域も含めて再検討すべき新たな段階を迎えたと述べつつ、同時に興隆溝のキビとアワの種子は栽培化されて間もない特徴を有しており、土器や石器(Fig. 2 上)、多くの動物遺存体の特徴を見ても、興隆窪文化期は依然として採集・狩猟を生業の主体とする段階であって、農耕社会ではなかったと強調している(趙志軍 2004)。趙氏の指摘は研究者としてじつに冷静沈着で的確なものであり、筆者も大いに支持したい(佐川・小林 200)。興隆窪文化期の畑作農耕はさながら縄文農耕や栽培のように、狩猟・漁労・採集とともに多様な食糧獲得手段のひとつでしかなかったようだ。

その後、西遼河流域における食糧中の雑穀類の比重は、漸移的に増加していった。それは趙

氏が鑑定した夏家店下層文化期の興隆溝遺跡第三地点出土のキビ種子に現れている。その形態と大きさは現在の栽培種と変わらず、3500 余年の時間の経過において、より確立した栽培種として進化したことを物語る(趙志軍 2004)。これは当然人類の働きかけを背景とするものであり、西遼河流域において畑作農耕が生業の主体を占める地域があったことを示している。また、それ以前の紅山文化期には定形的な農具として石鋤という耕具があり、石包丁という収穫具も登場する。そして、畑作農耕の比重の高まりは、集落間抗争開始の引き金となり、環壕集落(興隆溝第二地点)も登場する(劉国祥 2004)。

2 趙宝溝文化期の生業問題

興隆窪文化と紅山文化の間には今から 7000 ～6000 年前の趙宝溝文化が設定されている(楊虎 1994, 中国社会科学院考古研究所 1997)。筆者はこの段階が西遼河流域の生業において、畑作農耕の比重がやや増す時期とかねがね主張してきた(佐川 1995)。それは黄河中流域起源の舌状の石鋤が、農耕具として使用され始めたからである(Fig. 2-55・56)。この種の石鋤は磁山文化期や裴李崗文化期には、すでに普遍的な農耕具であったが、興隆窪文化期にはなかった。同時に土器組成にも大きな変化が発生する。まず、粗製土器に加えて精製土器が登場する。粗製土器の主体は依然、煮沸用の深鉢形土器であるが、口縁部直径が広くなり、また小型の鉢形土器も増加する。精製土器は胎土の精製化に加えて、ミガキ調整を施し、供献用の皿形土器やこの時期特有の祭祀用土器である尊形土器がある。このような土器の多様化は、畑作農耕の比重の若干の増加と関連がある、と推定するのである。



Fig. 2 興隆窪文化（上段）と趙宝溝文化（下段）の生活用具（縮尺通常 $\frac{1}{2}$ ） Main tool kit for life in the Xinglongwa (upper) and Zhaobaogou (lower) cultural stages

趙宝溝文化期の主体的生業に関する見解にも、一定程度に発達した畑作農耕であったとする見解もあれば(劉晋祥ほか 1996), それは過大評価であり, 畑作農耕の存在は否定しないが, 狩猟・漁労・採集が依然主体であったとする見解もある(劉国祥 2004)。この点については, ①この段階の遺跡を新たに発掘調査する際に, 興隆窪遺跡の発掘と同様に遺構の土壌の水洗選別を丁寧に行い, ソバやアワなどの炭化種子を発見して, 栽培種や進化の問題を比較する, ②農耕社会においては農具である耕具, 収穫具, 穀物調整具がセットで存在するはずなので, 今後石鋤, 収穫具の可能性もある短冊状の石製ナイフの使用痕研究を行う, ③生産の場である畑の遺構を発見し, 同時に人骨内の炭素・窒素同位対比の検査によって主体的依存食糧を推定して, 検証する必要がある(劉国祥 2004)。

さて, 趙宝溝文化期特有の尊形(古代儀式用青銅製酒器の尊の器形に似た)土器を祭祀用と推定する最大の理由は, その希少性はもちろん, 趙宝溝遺跡(中国社会科学院考古研究所 1997), 小山遺跡(中国社会科学院考古研究所内蒙古工作队 1987), 南台地遺跡(敖漢旗博物館 1991, 邵国田編 2004)で出土したものに, 動物の絵画が篋書きされているからである(Fig. 4)。また, 趙宝溝遺跡出土のほ乳動物骨を見るならば, 生業における狩猟の比重は依然として高いことがわかる。さらに, 趙宝溝文化期の遺跡には, 紅山文化期に登場する両面加工の三角形石鏃や骨鏃がない。大型の細石刃を素材とし, その末端両側縁の腹面側に二次加工を施すものが出土しており(Fig. 2-52), 筆者は従来これを石刃鏃と考えてきたが(佐川 1995), 現在はその確定に慎重である。それは石刃素材でないこと, 石刃核, 彫

刻刀形石器などの石刃製石器がないからである。鋸形・槍形の植刃器は未発見であるが、多量の細石刃が存在するので (Fig. 3-16・18), 主体的な狩猟具は、依然として鋸形・槍形の植刃器であった可能性がある。

3 尊形土器と動物文 — 隠れていた第4の動物 —

尊形土器に篋書きされた動物絵画の内もっとも有名な例は、赤峰市敖漢旗の小山遺跡2号住居跡床面出土のものである (Fig. 3-30, 4-1)。この尊形土器の動物は、従来からシカ、イノシシ、トリの3種とされてきた (Fig. 4-3)。いずれもその右側面を表現している。シカはその頭部、頸部、胴部前半、前脚を篋書きしている。頭部には口、細長い目、耳、長い角を、前脚には偶蹄類の特徴のふたつの爪を描いている。シカの右側にはイノシシの頭部のみを篋書きし、そこに細長い目とイノシシの特徴である大きな犬歯を描いている。イノシシの右側のやや離れたところにはトリの頭部と頸部、右翼を篋書きし、頭部には丸い目とくちばし、そして鶏冠のような部位を描いている。以上3種の動物の主要部位は、丁寧な斜格子沈線で充填している。さらに、各動物の表現していない胴部などには、斜格子沈線で充填した旋回文を必ず置いている。

さて、筆者はシカとイノシシの間がやや離れていることが以前から気になっていた。2002年9月、興隆溝遺跡第一地点B区の発掘調査を参観した際に、出土遺物の中に左右一対の大型肩胛骨があった。これは、元来、16号住居跡内の14号屋内墓の脇に重ねて置かれていたものである。鑑定の結果、スイギュウのものであることが判明している。興隆窪文化期はスイギュウ

が生息できるほど温暖で、水も豊富にあったのである。筆者は2002年11月にある展覧会で興隆溝遺跡に関する講演をすることになり、そのための映像資料を準備していた。その時に件の尊形土器の動物文の展開図も選択し、思わずシカとイノシシの間に目がいった。そして、そこに左上向きに湾曲した角状の物体の篋書きがあることに気がついた (Fig. 4-2・3)。その瞬間、筆者の脳裏には2004年9月に見た興隆溝第一地点のスイギュウの肩胛骨のことが浮かんできた。「この角状の物体の篋書きは、ウシの角ではないだろうか。」篋書きを改めて仔細に観察すると、顔面部や胴部は表現されておらず、向かって右側の一部が欠損しているものの、左右対称の角状物体のところに限って弧状の沈線が細かく加えられている。この沈線が直線でなく弧線であるのは、円錐形の物体の立体感を表現した可能性がある。したがって、この篋書きはスイギュウなどのウシ科動物の角を表現したものと考えるに至った。

4 趙宝溝文化期を含む先史西遼河流域の重要動物

趙宝溝文化期の重要動物

趙宝溝遺跡では小山遺跡の尊形土器に描かれた4種の動物の骨そのものが出土している (中国社会科学院考古研究所1997: 北京大学の黄蓋平分析)。シカではマーローが179点 (最小個体数11個体)、ニホンシカが39点 (同4個体)、ノロシカが129点 (同9個体)、イノシシが138点 (同9個体)、ウシ2点、トリではハクチョウ2点、キジが11点、竪穴住居跡などから出土している。そのほかにイヌ1点、タヌキ18点 (最小個体数3個体)、アナグマ9点 (同3個体)、ク

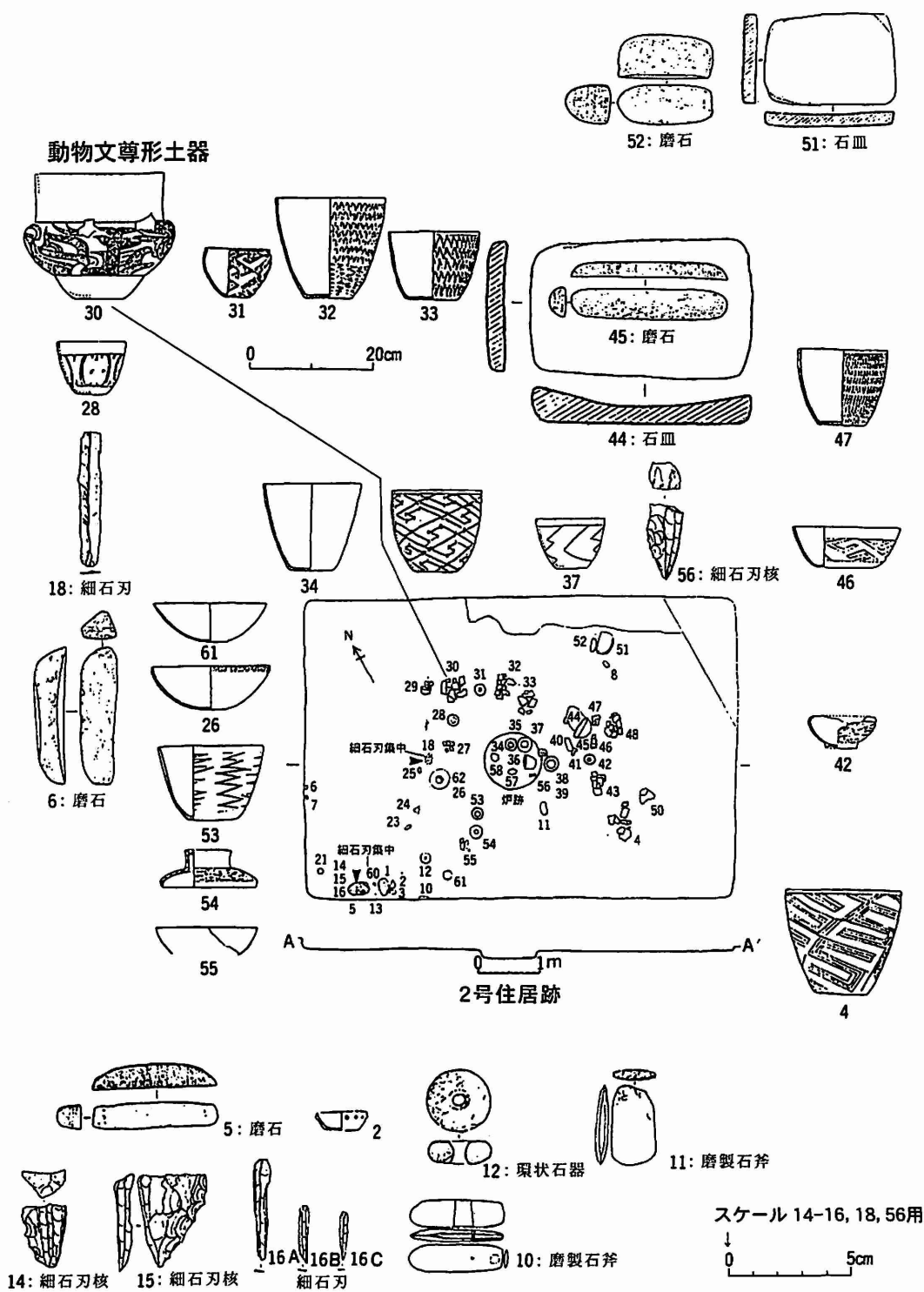
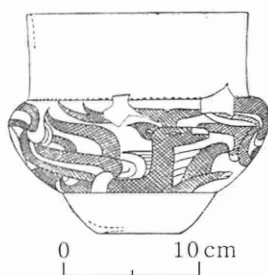
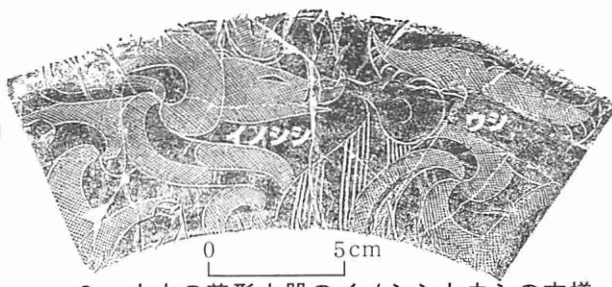


Fig. 3 小山遺跡2号住居跡と床面の出土遺物

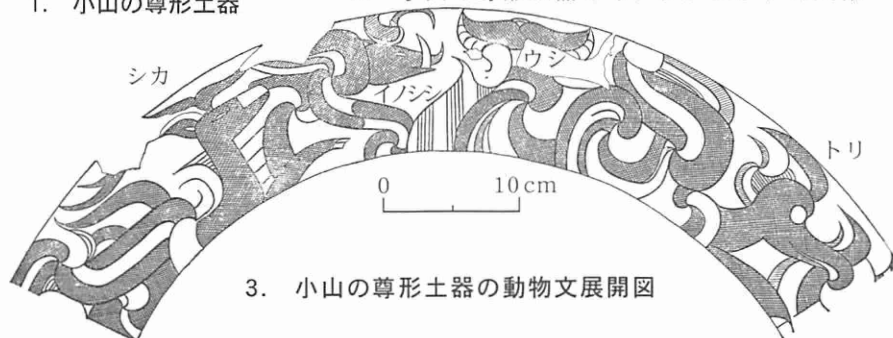
Distribution of cultural relics on the living floor of the pit-house No. 2 at the Xiaoshan site



1. 小山の尊形土器



2. 小山の尊形土器のイノシシとウシの文様



3. 小山の尊形土器の動物文展開図



4. 南台地の尊形土器の動物文展開図



5. 南台地の尊形土器の動物文展開図

Fig. 4 小山遺跡・南台地遺跡の尊形土器の動物文展開図
Animal design patterns of the Zun-shaped potteries found at the Xiaoshan and Nantaidi sites,
Inner Mongolia

マ4点、東北モグラ4点、モンゴルジリス1点、魚1点がある。趙宝溝文化期も興隆窪文化期と同様に、シカとイノシシの点数が飛び抜けて多く、最重要な狩猟対象物、すなわち食糧であったことがわかる。推定される平均体重もイノシシが135キロ、マーローのオスが200～250キロ、ニホンシカのオスが150キロ、ウシが250キロで、他の動物とは比較にならないくらい大きく、一頭仕留めると大量の肉が獲得できた。

さらに、黄氏が各部位の骨の残存状況や加工状況などを検討した結果、イノシシとノロシカはもっぱら食肉用に供され、それらの骨と角は骨角器の原料にはほとんどならなかったことが判明している。これに対して、加工痕が目立つマーローとニホンシカそしてウシは、骨角器の原料として選択されることが多く、とくに前二者はその角も含めて最も重要な材料であったという。

したがって、趙宝溝文化期の人びとが、食糧の上で多大の恩恵を得ていた比較的大型の動物であるマーローやニホンシカ、イノシシ、そしてウシを特別視し、尊形土器に篋書きしたことは、一応首肯できることである。ただし、趙宝溝と南台子の尊形土器に篋書きされた動物は、ともにシカだけである。

興隆窪文化期の重要動物

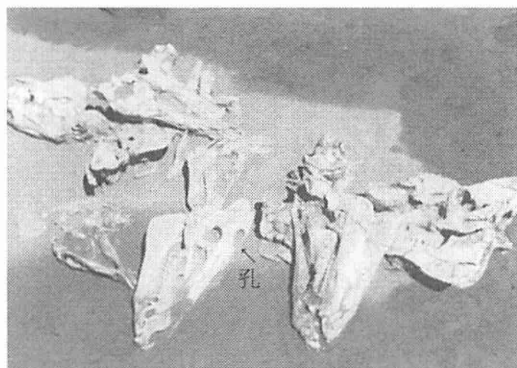
興隆窪文化期の人びともすでにシカとイノシシを特別視していた。興隆窪遺跡第一地点A区5号住居跡は、発掘された37基の住居跡中床面積が最大で、86.24平米に達する。その平面形も特殊で、集落内の特別な住居跡と考えられる(劉国祥2004)。それを裏付けるように、その床面にはイノシシの頭骨12点とシカの頭骨3点が、四肢骨などの他の部位の骨をいっさい含まずに集

められていた(Fig.5-1)。とくに、ほとんどのイノシシの頭骨の額には、円形か長方形に丁寧にくりぬいた孔があり、中にはそこを焼いて焦がしたのもあった。頭部穿孔は脳漿を取り出すためのものではなく、頭骨を使用した祭祀に伴うものであったことは明らかである。

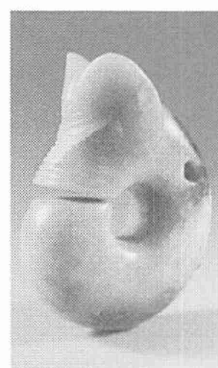
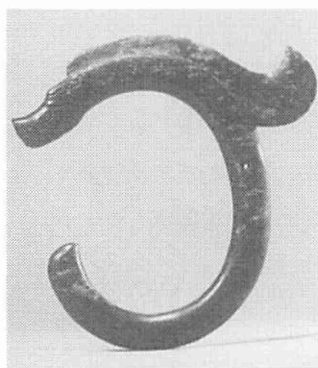
また、興隆窪第一地点C区南辺にある35号土坑底面から出土した2点のイノシシ頭骨とそれに連なる複数の粘板岩の剥片を、劉国祥氏は2頭の中国最古の龍の表現にとらえ、35号土坑を祭祀坑や犠牲坑の起源と考えている(劉国祥2004、劉国祥・邵国田ほか2004、劉国祥・田広林ほか2004)。その是非は今後中国内外で十分検討されることになろうが、保存の良好な1点のイノシシ頭骨の額にも、孔があげられていた。興隆窪では額に孔をあける例は他にもあるが、その動物はイノシシに限定される点に重要な意味があると考えられる。興隆窪遺跡の118号屋内幕では成人男性の右側にオスとメスの2頭のイノシシを仰向けにして副葬していた(中国社会科学院考古研究所内蒙古工作隊1997)。興隆窪で出土したほ乳動物中、シカの数量が最多であり、イノシシがそれに次ぐが、イノシシは、当時の動物祭祀あるいは狩猟儀礼においてシカよりもやや高いランクに位置づけられていたのだろう。劉国祥氏は、狩猟が食糧を獲得する面において当時の生業中、もっとも重要であったので、イノシシとシカが最重要な動物と見なされ、獲物の獲得量が十分であることと狩猟の成功を祈念するための儀礼において、両者が中心的存在であった、と推定している(劉国祥2004)。

紅山文化期以後の重要動物

趙宝溝文化期に続く紅山文化期の祭祀でも、イノシシはもっとも高いランクに位置づけられ



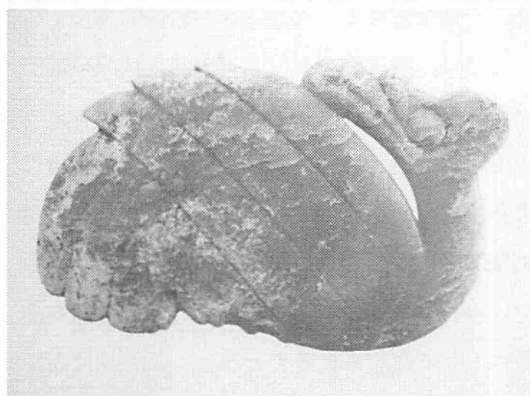
1. 兴隆沟遗址第一地点A区5号住居跡のイノシシとシカの頭骨



2. 紅山文化期の猪龍形玉器(左:三星堆拉,右:牛河梁第2地点出土)



3. 牛河梁第16地点第4号墓出土の人骨(男性)と玉器



4. 同左頭骨下のトリ形玉器(中国では鳳凰形玉器)

Fig.5 先史西遼河流域の重要動物 Important animals around the Western Liaohe river valley in the Neolithic period

ている(劉国祥 2004)。それは遼寧省牛河梁遺跡に代表される方形積石塚の箱式石棺墓には、動物形玉器を含む多量の玉器が副葬されており(Fig. 5-3)、その中にはイノシシを形象する(とくに鼻とタテガミ)猪龍形玉器(Fig. 5-2)や蚕形玉器(筆者はイノシシの鼻の誇張表現と推定する)が存在するからである。筆者は、鈎雲形玉器も2頭以上のイノシシが絡み合った状態を表現したものと推定している。牛河梁の祭祀用建物跡(通称・女神廟)から発見された彩色動物形土製品は、下顎に大型の牙が表現されているので、イノシシと推定される(遼寧省文物考古研究所 1997)。これらは西遼河流域の興隆窪～趙宝溝文化期のイノシシ祭祀の伝統の上に展開したものと考えられる。

このほかにトリとカメ(スッポン)を表現した玉器がある。トリ形玉器は赤峰市那斯台遺跡などでフクロウを表現したものが出土し、牛河梁第16地点第4号墓では鳳凰を表現したとされるものが、被葬者(男性)の頭の下にまるで枕のように置かれていた(Fig. 5-3・4: 朝陽市文化局ほか 2004)。しかし、シカを表現した玉器は存在しない。なお、牛河梁遺跡女神廟の土坑からはクマの下顎骨が出土している。

紅山文化期に続く小河沿文化期になると、それまでのイノシシを最重要視する伝統は、考古学的遺物の上ではたどれなくなるが、土器にシカを彩画したものがある。その後、西遼河流域では夏代、商(殷)代に相応する夏家店下層文化期、西周代と春秋時代に相応する夏家店上層

文化期と推移したが、後者の青銅器にはオルドス地域の青銅器の影響を受けた動物形を装飾した例が数多く見られる。遊牧生活と草原、それを取り囲む森林植生環境が広がっていた北方ユーラシア東西の文化交流を物語るものである。

5 ウシとトリ

ウシの絵は、興隆窪文化期から夏家店下層文化期の間では趙宝溝文化期小山遺跡の尊形土器に描かれた例が唯一である。興隆窪文化期から夏家店下層文化期までの遺跡で、ウシの骨が出土した例は少ない。ウシの生息数が少なく、したがって捕獲数も少なかったのであろう。

小山遺跡の尊形土器に描かれたトリの絵は、目が丸く、くちばしが長く、頸部が長い点に特徴があり、おそらく大型のトリと推定される。頭部の鶏冠状文様が何を示すかは不明だが、C字形文様とくちばしが下向きに湾曲しているのは、他のC字形、S字形、旋回文様の影響であろう。トリを推定する上で、趙宝溝遺跡から出土しているハクチョウの骨は示唆的である。純白で大型、渡り鳥（春夏滞在）でもあり、北方を代表するトリだからである。したがって、前述した牛河梁のトリ形玉器も、龍と同様の想像上の動物である鳳凰と断定せずに、他の現存する大型のトリの中で考える必要があるだろう。

夏家店上層文化期まではウシもトリも、絵として表現されたのは、小山の尊形土器の例が唯一である。筆者は、これを簡単に例外と見るのではなく、先史西遼河流域の人びとの動物観や動物祭祀を復原する上で積極的に評価した方がよいと考える。つまり、ウシと大型のトリがイノシシやマーローなどに準ずる位置づけをされ

ていたことを暗示している可能性があるからだ。だからこそ、尊形土器という趙宝溝文化期に特有で特殊な土器に描かれたのであろう。

6 まとめ

ウシの絵画の発見と環境変化

趙宝溝文化期の小山遺跡出土の尊形土器に描かれた動物絵画は、東・北アジアの新石器時代の事例としては希有な存在であり、注目されてきた。しかも、ここに従来誰にも気づかれなかった第4の動物、すなわちウシが隠れていることを筆者は発見したので、今回開陳することにした。多くの研究者のご意見を承りたい。尊形土器の動物絵画は、先史時代の西遼河流域の自然環境が、砂漠化の拡大が懸念されている現在と大きく異なり、広葉樹と針葉樹からなる豊かな森林、そして河川や沼沢地が、人びとが住む村の周辺に存在したことを示している。同時に当時の人びとの動物観などを示している。

北方狩猟採集民の動物観との比較

筆者は本学大学院文学研究科の榎森進教授の「13～19世紀における列島北方地域とアムール川流域文化との相互関連に関する研究」(文部科学省科学研究費補助金基盤研究B(2))の研究分担者として、2002年以降サハリンから沿海州、中国東北地方を調査する機会があった。そこでアムール川流域で生活する先住民のナナイやウリチなどの動物観や動物祭祀、狩猟について見聞を広げた。先住民のシャーマンの儀式用衣服と一般人のハレの衣服には、多くの動物が見え隠れしていた。それは想像上の動物・龍を最高位(中国側から後世受容)と考え、他にクマ、トラ、トリ、ヘビ、サケなどである。クマは、北海道やサハリンのアイヌと同様に森の恵み(食

糧)を象徴する動物であり、そこに宿る靈魂を戻してやるクマ祭も行っていた。アムール川流域で狩猟・漁労・採集を生業とする近世・代の先住民の動物観は、新石器時代の西遼河流域の狩猟採集民と比較すると、かなり異なっている。

東北日本の縄文時代の土器に描かれたり、土製品・骨角器として製作された動物も、決して単一ではなく、中期のトリやヘビから、後期のイノシシやクマへ、さらに縄文晩期～続縄文時代(北海道)のクマへと変化していった(斎野編 1999)。このことは縄文人の動物観や動物祭祀も変化していたことを示している。とくに中期から後期への動物観の変化は大きい。これは温暖化の中で培われたクリ栽培やヤマモモ栽培などに大きく依存する植物食重視の食糧が、気候の冷涼化に伴って動物食への依存度を高めていったことと関連しよう。また、本州では弥生時代になると稲作農耕の広がりの中で、イノシシ、クマの造形は次第に姿を消す。

第4の動物への反応と龍鳳

筆者は小山遺跡の尊形土器の動物文の中にウシの角の表現を発見して、即座に興隆溝遺跡の日中共同研究を指揮する文化庁の岡田康博氏と中国社会科学院考古研究所の劉国祥氏に電話をし、私見の是非を問うた。岡田氏は私見を支持し、劉氏ははじめ不明とし、4ヶ月後に北京で再会した時に支持を表明した。

さて筆者は、紅山文化期の龍鳳の観念、つまり猪龍形玉器や鳳凰形玉器という名称に疑問を懐いてきた。それは小河沿文化期にも存続し、黄河流域にも受容されたということを証明する考

古学上の証拠がないからだ。先史時代の西遼河流域の遺跡から出土する実存した動物骨との関係で、当時の人びとの動物観を冷静に検討すべきであろう。

文献(あ～お順)

- 敖漢旗博物館 1991「敖漢旗南台地趙宝溝文化遺址調査」『内蒙古文物考古』1991年第1期
- 斎野裕彦編 1999「動物デザイン考古学」(地底の森ミュージアム平成11年度特別企画展展示解説図録),仙台市富沢遺跡保存館
- 佐川正敏 1995「アジアから見た縄文文化」『文明原学論—江上波夫先生米寿記念論集—』山川出版
- 佐川正敏・小林亜矢 2004「中国遼西地区新石器時代中期興隆窪文化段階の文物集成」『アジア文化史研究』第4号,東北学院大学大学院文学研究科
- 邵国田編 2004「敖漢文物精華」内蒙古文化出版社
- 中国社会科学院考古研究所 1997「敖漢旗趙宝溝—新石器時代聚落—」中国大百科全書出版社
- 中国社会科学院考古研究所内蒙古工作隊 1987「内蒙古敖漢旗小山遺址」『考古』1987年第6期
- 中国社会科学院考古研究所内蒙古工作隊 1997「内蒙古敖漢旗興隆窪聚落遺址 1992年発掘簡報」『考古』1997年第1期
- 趙志軍 2004「探尋中国北方乾作農業起源的新線索」『中国文物報』2004年11月12日第5版
- 朝陽市文化局・遼寧省文物考古研究所 2004「牛河梁遺址」中国・学芸出版社
- 日本中国先史時代遺跡共同研究実行委員会・中国社会科学院考古研究所共編 2003「中国 東北地方新石器文化と列島縄文文化の比較研究 I」
- 劉国祥 2004「東北文物考古論集」中国・文物出版社
- 劉国祥・賈笑氷・趙輝明・邵国田 2004「内蒙古赤峰市興隆溝聚落遺址」『考古』2004年第7期
- 劉国祥・賈笑氷・趙輝明・田広林 2004「内蒙古敖漢旗興隆溝遺址 2003発掘」『2003中国重要考古発見』(中国国家文物局),中国・文物出版社
- 劉晋祥・董新林 1996「浅論趙宝溝文化的農業經濟」『考古』1996年第2期
- 遼寧省文物考古研究所 1997「牛河梁紅山文化遺址與玉器精粹」中国・文物出版社
- 楊虎 1994「遼西地区新石器—銅石併用時代考古文化序列與分期—」『文物』1994年第5期